

## 四、エコヒイキの神

「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」

ヤコブは眠りから覚めて言った。

「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」

そして、恐れおののいて言った。

「ここは、なんと恐れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」(創世記二八章一五節～一七節)

わびしい「北帰行」でした。孤独な逃避行でもありました。その主人公は、アブラハムの孫のヤコブです。兄に命を狙われていると知って、母リベカのすすめで、母の実家のある北のハランにいる伯父ラバンを頼っての一人旅です。どうして、こんなことになったのでしょうか？

ヤコブには、双子の兄、エサウがいました。父イサクは、野性的なエサウを愛し、母リベカは、知的なヤコブを愛しました。この極端な偏愛が、事件を起こします。父イサクが年老いて、家督相続の時が近付いていました。母のリベカは一計を案じて目がよく見えなくなったイサクを騙して、ヤコブに家督相続の祝福をさせ、そのためエサウが怒ってヤコブを殺して恨みを晴らそうとしていることが分かったのです。その結果、逃避行となったのです。(創世記二七章一節～二八章五節)

必死に逃げて、夜を迎えたヤコブは野宿します。

ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。(二八章一一節)

おちおち寝付くこともできなかつたでしょう。恐怖と後悔と孤独感に襲われていましたが、いつしかとうとうと眠り始めます。

すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。見よ、主が傍らに立って言われた。

「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。」(二八章一二節～一四節)

有名な黒人霊歌「ヤコブの梯子」の場面です。どうしてヤコブに神さまが傍らに立っていることが分かったのだろうか？旧約時代の人には、神さまが見えたのだろうか？などというような詮索は、余計なことです。この物語の言わんとすることは何なのかを探ることの方が重要です。

ヤコブは、明らかにいけないことをしでかしたのです。相続権を掠奪したのですから。ところが、不思議です。神さまは、そのことを不問に付しておられる。もしも私が神さまだったら、一言、言いたいところです。

「どうだ、心細いだろう。これもお前が蒔いた種の結果だぞ。」

とか、なんとか。私は恩着せがましい人間ですから、どうしてもこういうことを考えてしまいます。しかし、神さまは恩着せがましい方ではありません。ヤコブに対して咎め立てをなさらないのです。そればかりか、ヤコブの味方になって守ってあげる、というのですから、これこそエコヒイキとしか言いようがありません。おいおい、騙されたエサウは、どうなるの？と言いたくなりますね。

旧約を読んでいると、神さまはイスラエルばかりヒイキにしているように見えることがよくあります。よく考えると、それは当たり前のことです。イスラエルの人に向かって、神さまは、こうなのだぞ、ということを伝えるために書かれたものだからです。私が、神さまはすばらしい、私にこんなによくしてくださっている、と人々に伝えようとすれば、私以外の人のことは二の次になってしまいます。この箇所は、ヤコブの立場に立って語られていますから、エサウのことは二の次になっているのだと思います。

「エッ！」

私の顔は青ざめていました。旧制の高知高校の三年の一学期の終わり、成績表を貰った時のことです。その年の四月に洗礼を受けた私は、すっかり教会に「はまって」いました。教会にいると楽しくて仕方ありませんでした。自分のあるがままでいられたからです。だから、学校よりは、教会のことで頭がいっぱいで、教会のあらゆる集會に顔を出して、みんなに持ち上げられていい気分でした。その反面、学校はちっとも面白くなく、勉強の方はさっぱりでした。その前年は、映画研究会に入っていて、一カ月に三六本も映画を見ています。成績が下落していることは覚悟していました。まず、順位を見ました。

四三分の三八、全教科一一の平均点が六一・八。英語、ドイツ語、倫理、哲学の四教科が赤点です。それに病気長期欠席が何人かいました。事実上のビリです。当時の日記には、こう書いてあります。

「古今未曾有の悪成績。ドイツ語、英語、哲学が赤点では話にならぬ。席次もほとんど尻に近い。頭に爆弾を叩きつけられた感じだ。……現状では来年の成功（大学合格）は到底覚束ない。」

この日に初めて、神様に祈った、と書いています。とにかく、その時点では、発奮したのですが、その後がよくなかった。教会のキャンプが入ったのです。それがまた楽しくて、楽しくて！せっかく立てた勉強のスケジュールも台無しになって、教会に入り浸りとなりました。大陸生まれの私は、あきらめも早かった。

「これでは、国立は無理だ。私立の同志社なら（同志社の皆さんごめんなさい！）大丈夫だろう。」

ということで、同志社の神学部を受けるかな？と洩らしたのが、結局、今の私を造ることになったのです。当時、土佐教会は、六〇年の歴史でしたが、久しく神学部の道に進む人がいなかったのです。すでに、理科にいたS君が、早くから神学部に進むと決めていましたから、一挙、二人が進むという「歴史的な大事件」に発展してしまったのです。

それからいろいろなことがあったのですが、やっぱり「古今未曾有の悪成績」を取っていなかったら、決して起こらなかったことです。成績が悪いのは、まったく百パーセント、自分の責

任です。しかし、今から考えると、そのことを神様がご用いになったのだと思います。今、私は、この仕事をするために神様に造られた、これ以外の仕事なんてまったく考えられません。

ヤコブにとっても、エサウをだました結果の逃避行になったのですが、その事件なしに後のヤコブはありえなかった。とすると、あのルズでのわびしい野宿は、彼にとっての新しい出発点になった、ということでしょう。

ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」

ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立て、先端に油を注いで、その場所をベテル（神の家）と名付けた。ちなみに、その町の名はかつてルズとよばれていた。（二八章一七節～一九節）

私たちの善悪の知識では、孤独と後悔と不安のきわみだった「ルズ」は、同時に「ベテル」（神の家）でもあったわけです。同じ出来事でも視点を変わると正反対の結果ともなります。この「視点を換えること」を「悔い改める」と言います。旧約には、それだけでは決して教科書には載せられない人間的な泥臭い出来事が、いっぱいちりばめられているのですが、そこには、それらの出来事の背後にじっと見守っている神の目があると信じた筆者の信仰が秘められているのです。その意味で旧約は、正直で、飾らずに間接的に神の愛を指し示しているのです。私は大好きなのです。イエスは、旧約のそのような面を知らせようとしたのではないのでしょうか。そういえば、新約には、このような言葉がありました。一五歳で父と財産を失って不幸のどん底にあるといじけていた私が、教会で初めて出合って、よーし、と希望を持つことができた言葉でもあります。神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということをして、わたしたちは知っています。（ローマの信徒への手紙八章二八節）

救われたと信じた人にとって、たとえ、どんなに不幸だと思われる出来事も時間の経過のうちに、必ずプラスになっていることに気づくので、神は「エコヒイキの神」に映るのです。

ところで、エサウはどうなったのでしょうか？神さまは、時の経過の中で、エサウの心も癒しておられます。二十年後、ヤコブとエサウは劇的な和解をします。

エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた。（創世記三三章四節）

さらに、父イサクの生涯の終わりを、聖書は、こう結んでいます。神さまは、エサウも父イサクをも顧みていてくださったのです。

イサクの生涯は百八十年であった。イサクは息を引き取り、高齢のうちに満ち足りて死に、先祖の列に加えられた。息子のエサウとヤコブが彼を葬った。（創世記三三章二八節）